

<ラウンドテーブル報告2>

学生・職員との協働によるFD・キャリア教育 —「知恵」の共有を目指して—

【企画者】清水 亮(三重中京大学)

【司会者】清水 亮(三重中京大学)

【報告者】齊藤真左樹(日本福祉大学)

1. 相次ぐ義務化に戸惑う教育現場

2009年のFD義務化に続き、2011年度からはキャリア教育も義務化された。大学全入時代に突入した現在、各大学は、2008年12月の中教審答申に代表される「教育の質保証」の重圧の中で、こうした矢継ぎ早の義務化にとまどっているのが実情ではないだろうか。

人気映画「踊る大捜査線」の主人公の台詞を借用すれば、「事件は会議室で起こっているのではなく現場で起こっている」のであり、大学教育もまた、現状を直視して、現場の対応を優先するスタンスに立たなければ、ステークホルダーの学生のためになるFDもキャリア教育も推進はできない。

現場重視の姿勢を取る時、重要になるのは、教員の発想・感性・知性だけに頼らず、大学の構成員である学生や職員とともに進めるという方向性ではないだろうか。学問的知識ではなく、さまざまな人々の知恵の共有が必要なのである。

2009年12月に出版された『名ばかり大学生：日本型教育制度の終焉』(光文社新書)で、河本敏浩は、目の前の大学生の学力不足について、中学・高校の教育に起因すると非難するだけの大学教育関係者を批判しながら、これからの日本の大学教育を生かすも殺すも、それは、大学教育関係者の努力にかかっていると主張しているように感じられる。

いったいどのようにしたら、ステークホルダーの学生を、中教審が目指す姿に、大学4年の間に育てることができるか。その実現のためには、大学の教員・職員そして学生、地

域を含めた大学のコミュニティを挙げての真摯な努力が不可欠ではなかろうか。そのような努力なしには、目の前の大学生が、キャリアを考えるにあたり、必要なものは何かを、しっかりと把握することは不可能だろう。今、大学に求められているのは、教員が、学生・職員との協働で、知恵を共有し、大学のFD・キャリア教育を推進することである。

このラウンドテーブルでは、教職協働で有名な日本福祉大学事務局長兼教育開発部長の齊藤真左樹氏に話題提供者をお引き受けいただき、日本福祉大学における実践報告で口火をきっていただいた。

2. 一つの答～日福スタンダード～

日本福祉大学は名古屋市中心部からは名鉄電車で約1時間南下した知多半島に位置する。キャンパス全体が里山の中に位置し、海岸も徒歩圏内、自然に恵まれた環境である。愛知県内の各大学でも「都心回帰」が起こる中、本学はこの「知多半島」にある、自然、文化、伝統、地域で活躍する人々などを教育資源とした、体験型フィールド学習を重視してきた。

我が国で初めて「社会福祉学部」を設置した大学であり、愛知県にありながら47都道府県から学生が集まっていること、約65,000人の卒業生が全国で活躍していることなどから、2001年度より通信教育部を開設し、「生涯学習型ネットワークキャンパス」を展開し、通信教育部のICT活用実績を活かし、通学課程でも早い段階からe-learningを積極的に導入し、教育実践を行ってきた。それらの実践が2003年度以降、「特色ある大学教育プログラ

ム」や「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(いわゆる「GP」)などに多数採択されてきた。

2009年度には、「福祉大学スタンダードきょうゆうプログラム」と題した取組みで、文部科学省の大学教育・学生支援推進事業(テーマ A)大学教育推進プログラムに採択されている。この取組みでは、日本福祉大学の建学の精神を受け継ぐ教育標語「万人の福祉のために真実と慈愛と献身」を体現するために必要な力を「真実=見据える力」、「慈愛=共感する力」、「献身=関わる力」、それらの力の基礎となる「伝える力」を加えた「四つの力」を日本福祉大学の学生が身につけるべき共通の力、「日本福祉大学スタンダード」と定義づけている。現在はこの「四つの力」を「福祉力」と言い換え、日本福祉大学における学士力と位置づけている。

さらに、日本福祉大学の学生、教員、職員に必要な「見据える力」「共感する力」「関わる力」「伝える力」とはそれぞれ何なのか、を明らかにし、これらの力を学生、教員、職員で共有し、身につけるためのプログラムを「スタンダードきょうゆうプログラム」として組み立てている。

3. 教職・学生協働のキャリア教育

さまざまな日本福祉大学の取組みの中から、今回は、齊藤氏に「オンデマンドコンテンツを活用した教職・学生協働による初年次からのキャリア教育」というテーマで、話題提供していただいた。

話題提供要旨

日本福祉大学では2005年度よりキャリア教育の一部をオンデマンドコンテンツにより初年次から全学的に配信している。入学前学習コンテンツとなる「日本福祉大学入門」、入学前から入学後の履修登録で活用する「科目ガイダンス」をはじめ、入学後に自校史を学ぶ「日本福祉大学の歴史」、現代社会における福祉の広がり学ぶ「福祉社会入門」、大学が立地する知多半島について学ぶ「知多学」、広がる福祉社会の仕事学ぶ「ふくしの仕事」

などが体系的に配置され、毎年多くの学生が履修している。これらのコンテンツは「インストラクショナルデザイナー」である職員が中心となり、科目担当教員、学生、時には過去にその科目を履修した卒業生などとも協働して開発したものである。実際にいくつかのコンテンツのデモを交えながら、教職・学生協働による授業コンテンツの開発経緯、開発の過程での効果、オンデマンドコンテンツの配信による学生への教育効果、教員へのFD効果などについて紹介する。

4. 他大学でも多様な取組が...

齊藤氏の話提供後は、集まっていたいた学生・教員・職員のみなさんに対等な立場から自由に意見を出していただき、さまざまな考え方を抽出し、議論を展開させていただいた。各大学の手探りの試行錯誤の取組みの中にも他大学のヒントになる実践は含まれていようし、学生や職員の率直な生の声の中にこそ本質的な課題が見えてくることもあるのではないだろうか。大学の様々な実例や参加者の自由な意見交換を重ね、真のFD・キャリア教育のありようを探りたかったのである。

キャリア教育界の論客として名高い亜細亜大学の宇佐見義尚氏や学生参画型FDの推進者として知られる岡山大学の橋本勝氏、本年3月までは学生の立場で、また4月以降は職員の立場でこの問題に直接向き合ってきた法政大学の平野優貴氏などの参加が見込まれており、活発な論議が予想通り展開された。

こうした議論の輪に加わりたいと考える多くの学生・教員・職員に、積極的にご参加いただき、明日から使える、学生・職員とFD・キャリア教育を進めるアイデアを、ほんの小さなものでもポケットに入れてお帰り願うというラウンドテーブルの到達目標は達成できたのではないだろうか。評価はラウンドテーブルの参加者に任せたい。